

令和3年度 全国学力・学習状況調査 箱根町立小・中学校の調査結果について

令和3年5月27日に実施された全国学力・学習状況調査の箱根町の結果を次のとおりまとめました。

1 調査の目的（文部科学省より）

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- ◇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

2 調査の概要

箱根町では、4校95人の児童生徒が参加
(内訳：町立小学校3校6年生43人 町立中学校1校3年生52人)

3 調査内容

(1) 教科に関する調査（国語、算数・数学）

- ① 身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※平成30年度までは、知識を問うA問題と、知識の活用力を試すB問題に分けて出題していたが、新学習指導要領で示されている資質・能力の三つの柱、特に『知識・技能』、『思考力・判断力・表現力等』が一体的に育成されるという理念を踏まえ、平成31年度から①と②を一体的に問うこととする。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 (例) 国語への興味・関心、授業内容の理解度、読書時間、家庭学習の状況 など	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 (例) 授業の改善に関する取組、指導方法の工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況 など

4 調査時間

〈小学校〉

1 時限目	2 時限目	
国語 (45分)	算数 (45分)	児童質問紙 (20～40分程度)

〈中学校〉

1 時限目	2 時限目	
国語 (50分)	数学 (50分)	生徒質問紙 (20～45分程度)

5 結果の概要

(1) 教科に関する調査結果の分析内容について

◆小学校【国語】

平成 31 年度の調査結果では、問題文の意図をしっかりと読み取り、目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にして決められた条件・字数でまとめて書くことに課題が見られた。今年度は無解答率が下がり、問題に向き合い粘り強く解答しようとする意識の改善が見られたが、正答率は低い傾向にあった。

調べたことについて、資料を使ってスピーチする「話すこと・聞くこと」の設問では、資料を用いた目的についての理解は高かった。一方、スピーチの内容を明確に伝えるための「スピーチメモ」を効果的に活用することができていなく、事実と感想を区別して話の構成を考えることについての正答率は高くなかった。

説明的な文章を読み、分かったことをまとめる「読むこと」の設問では、内容の中心となる事柄は把握できていたが、目的に応じて中心となる語や文を見つけて要約したり、必要な情報を見つけるために文章と図を結びつけて読んだりすることに課題が見られた。

自分の考えを主張する文章を書く場面を設定した設問では、文の中で漢字を正しく書くことや修飾語と被修飾語の関係を捉えることなど、言葉の特徴や使い方に関する事項に課題が見られた。

文や文章の構成をしっかりと理解することが、内容把握や自分の考えを文章にまとめることの改善につながると思われる。

◆小学校【算数】

平成 31 年度の調査結果からの課題は、①除法の意味理解、②図形の構成の 2 点であったが、①については今年度の状況も大きな変化は見られなかった。②については全国平均正答率とほとんど変わらず、進歩が見られた。すべての領域で全国平均正答率と変わらない学校があり、進歩が見られた。

①の除法の問題を含め「数と計算」に課題が見られた。ここ数年、形式を変えて出題されている「商が 1 より小さくなる等分除（整数）÷（整数）」の計算や「道のりと速さをもとに時間を求める除法の式」、「道のりの差を求める加減の問題」など公式をもとに解を求める問題が全国平均正答率を下回った。一方、「余りのある除法の商と余りをもとに必要な数を求める問題」では、全国平均正答率を上回った学校もあった。

②の図形に関する問題では、図形の構成に関する問題の正答率は伸びたが、複数の図形を組み合わせて面積を求める問題に課題が見られた。公式は分かっているにもかかわらず三角形の底辺、高さをきちんと把握できていないことが原因と思われる。

データの活用に関する問題では、「資料から分かることを選択し、記述する問題」と「資料を基にグラフを読み取ったり、示された特徴を捉えるために適切なデータを収集したりする問題」については全国平均正答率に近い数値であった。

日常生活で出会う様々な問題場面において、問題を解決するために、場面や状況に応じて、必要な数量やその関係を捉え、図や式などに表したり、結果を適切に導いたりすることが重要であると考えられる。

◆中学校【国語】

平成 31 年度の調査結果では、「読むこと」はほぼ全国平均と同等の正答率であったが、今回の調査を領域等別で見ると「読むこと」の領域の平均正答率が最も低く、全国平均との比較でも最も差が大きくなった。

文学的文章の内容理解が十分でなく、具体的には場面の展開、登場人物の心情や行動に即して読むことや、言語の意味理解や登場人物の言動の意味を考えることに課題が見られた。文学的文章を読むためには、言葉を手掛かりにしながら文脈をたどり、視点を定めて読むことが内容理解に結びつく。今後の指導に当たっては、まずは語彙を量と質の両面から充実させることが重要である。文章を読み、引用して解説したり、自分の考えをまとめたうえで相手の考えを聞き、自分の考えを広げたり深めたりすることができるような活動を取り入れていく必要がある。

各設問においては、全国の平均正答率の高低と同様の傾向が見られたが、特に正答率の低い問題において全国平均との差が大きく見られた。「話すこと・聞くこと」では、話合いの話題や方向を捉えて的確に話すこと、「書くこと」では、書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して推敲すること、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、敬語の使い方に課題が見られた。

言葉の特徴や使い方に関する事項が、単に知識として獲得されるだけでなく、実際の話や文章、言語活動の中で適切に使えるようにしていくことが大切である。

◆中学校【数学】

平成 31 年度の調査結果からの課題は「数学用語を正しく理解し活用する」、「筋道を立てて考え、説明したり証明したりする」、「問題を把握し、考察し、的確に処理する」の 3 点であった。今年度の調査でも全体的に大きな変化は見られず、正答率も平成 31 年度同様であった。

「数と式」の領域については、文字を用いた式の四則計算や事象に即して解釈したことを数学的に表現する（方程式をつくる）問題に課題が見られた。一方、「4 つの数の和が 4 の倍数になる説明」の問題は理解できていた。

「図形」の領域については、平行四辺形の条件（性質）を用いて、事柄が成り立つ理由を筋道を立てて説明したり、数学的に表現したりすることに課題が見られた。

「関数」の領域では、関数の意味を理解したり、与えられた表やグラフから必要な情報を適切に読み取ったりすることはできていた。一方、問題解決の方法を数学的に説明することに課題が見られた。

「資料の活用」の領域では、ヒストグラムからある階級の度数を読み取ることはできるが、データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに課題が見られた。

各領域での記述問題・証明問題では、正答率の高い低いに関係なく無解答が多く、正答率も低くなっている。問題を的確に把握し、解決する思考の過程を筋道立てて説明できるようにすること、数学的な見方や考察する力をつけていくことが必要である。

(2) 児童生徒に対する質問紙調査結果の分析内容について

【小学生の質問回答より】

- 「自分には、よいところがある」については、約 80%の児童が肯定的な回答をしており、「地域行事に参加している」、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」の回答とともに、全国平均を上回った。箱根ハートフルプログラムの取組や地域教育を推進してきた成果が表れてきている。
- 「英語の勉強は、好き」については、約 77%の児童が肯定的な回答をしており、全国平均を上回った。昨年度より 3 小学校を兼務する英語専科教諭を配置しており、英語で自分の考えや気持ちを伝え合う活動を充実させた成果が表れてきている。
- 「学校の授業時間以外における 1 日当たりの学習時間」について、「1 時間以上学習している」と回答した児童の割合は一昨年度よりも減少しており、全国平均も下回った。また、「朝食を毎日食べている」、「毎日、同じくらいの時刻に就寝、起床している」と回答した児童の割合も、一昨年度及び全国平均よりも大幅に下回った。まずは基本的な生活習慣を整えたうえで、学習習慣づくりに向けて取り組む必要がある。
- 「普段(月～金)、1 日当たりのテレビゲーム(携帯式のゲームやスマートフォンを使ったゲームも含む)をする時間」について、「2 時間以上ゲームしている」と回答した児童の割合は約 75%(その内の約 33%は、4 時間以上のゲーム)であり、全国平均を大幅に上回った。また、「携帯電話やコンピューターの使い方」について、「家の人と約束がない」と回答した児童の割合は約 26%であり、全国平均を上回った。テレビゲームや携帯電話等を扱う上でのルールやマナー、一日の有意義な過ごし方等について学校と家庭で連携しながら考えていく必要がある。

【中学生の質問回答より】

- 「学校の授業時間以外における 1 日当たりの学習時間」について、「1 時間以上学習している」と回答した生徒の割合は約 70%であり、本町の過去 5 年間の中では一番高い数値となっている。また、「学校の授業時間以外に、毎日 30 分以上読書をしている」と回答した生徒の割合は約 40%であり、全国平均を 11 ポイント上回った。生徒に見通しをもった学習計画を立てさせたり、おすすめの本を紹介する取組を行ったりしたことが、学習や読書に取り組む習慣づくりにより影響を与えたと考える。
- 「将来の夢や目標をもっている」、「難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦する」について、肯定的に回答した生徒の割合は、全国平均よりも 10 ポイント以上上回った。夢や目標を持つことが、生徒の意欲的な行動につながっていったと考える。
- 「地域行事に参加している」、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」と回答した生徒の割合が、全国平均を上回った。コロナ禍で活動が制限されている中ではあるが、生徒は地域との関わりをもって生活していることが分かる。
- 「国語の勉強は、好き」については、約 70%の生徒が肯定的な回答をして全国平均を上回ったのに対して、「数学の勉強は、好き」では 50%、「英語の勉強は、好き」では 42%が肯定的な回答であり、数学、英語ともに全国平均を下回った。園小中一貫教育を推進していくうえで、苦手意識の要因を的確に把握し、その解消に努め、小中の学びの接続を円滑にしていく必要がある。